

土曜 ライフ・楽しむ

災禍に備え断捨離 難しさ実感

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



捨てられない人間なんです。いつか使うかもしれない、またきつと役立つはず、などと考え捨てるのを躊躇してしまいます。これは棚を埋める書類に限りません。しっかりとした菓子箱なども場所ふさぎになっています。

外出自粛を余儀なくされるこんなときこそチャンスと、年明け早々から会社の古い書類の整理を始めました。創業以来20年余りですが、あるはあるは、びっくりするほどの量です。情報誌の誌面作りのために集めた情報は、データもありますが、やはり多くは紙にして残しているのです。古い人間なのでしょう。

まず、書類を「要・残す」「不要・処分する」に分類します。残すか、処分するかの境目を考えると、大いに迷ってばかりです。不要なものにはさらに「普通に処分」と「セキユリティーを考えて処分」に分類します。

その判断のために内容を確認するのですが、そこで問題発生。思い出がよみがえってくるのです。特に故人となつた方の手書きの原稿を読むと、その懐かしい顔が浮かびます。また、若いころの自分にも会えて、こんなことに注目していたのかと驚かされることもあり、時間ばかりかかって仕方ありません。

断捨離を提唱したやました

ひでこさんは、「断捨離という新しい片づけ術かと思っかもいれませんが、そうではありません。モノへの執着を捨てるのが最大のコンセプトです」と言います。そして「身の回りをキレイにするだけなく、心もストレスから解放されてスッキリする」のが断捨離の目的とのこと。モノを俯瞰し、「今の私が必要なもの」だけを残していくことが大切だそうです。

しかしこれが難しい。要、不要を断じ、執着を捨てることのできるか、ちょっととしたストレスも感じています。年賀状も整理しました。その中に「今年で年賀状をやめ

ます」と書かれたものがありました。私宛てだけ不要と判断されたのでなければいいのですが、今年ばかりは「息してるよ。安心してね」という安否確認の意味があつてホツとしたのも事実です。

コロナ終息の気配が見えない中、いつなとき自分自身の身にわざわいが降りかかるかもしれない、明日がどうなるか全く不明です。真さんのようにトランクひとつとはいきませんが、少しでも身軽にしようと思えます。見られて困るものはないはずですが、大事なものがどこにあるかわらないはわかるようにしておかなければならないと、今日も片づけに励み、引越前夜のようです。でも、「あれはどこいった?」ときっと探し回る未来も見えています。